

東京サミットそれ
れにOPEC総会
と重要な国際会議
が相次いだ、中
国の今回の全人
民代表大会(第五
期第二回会議)も
ひと中国のみならず、国際的
に見てきわめて重要な意味をも
つものであった。

私が上海、西安を経て北京に
到着したのは、ちょうど全人
民代表大会が開閉した日(六月
十八日)であったが、「四つの
現代化」計画の調整と民主・法
制化という二つの課題を議した
今回の全人代表大会は、中
国の社会主義建設を大衆闘争的
なレベルから「人民民主」の制
度的保障へと転換させないかぎ
り、中国社会の安定と発展はあ
り得ないという深刻な反省を基
づくものであった。こうした転
換の主筆者の一人が、かつての
北京市のリーダーで文化大革命
の重要な権威対象となつた彭真
氏であったことも、印象深いも
のがある。

回が三度目の訪中であったが、
それだけに、今日の中国の姿化
の大きさをますます実感せず
にはいられなかった。その変化
は、要するに、「毛沢東思想」
を建国の理念としてきたこの国
にとつての未曾有(みそろう)の
転換を意味するものであるがゆ
えに、そこに含まれている矛盾
もまた大きいといえよう。

まず第一に、依然として「毛
沢東思想」が掲げられている
いま大いに人気を得ていると
思ふ。薄一波や聶華橋といった五
〇年代初期に活躍した経済幹部
が、例の「民主の壁」に今日も
際新聞が出ていて暖(き)わ
あちろで見かけたが、この画
れ。

「四つ」の現代化」は、膨大な
労働人口の雇用問題ともからん
で、現代化「機械化」で力化と
いっわけには困難にゆかない」と
とも自明であり、この点は中国
の指導者自身がすでに自覚して
いるところである。

演劇や文壇も百花のものか
の五月から復活した。西安は
四川省の古興劇(高老登奇遇)
を演じたが、これにはほま
に空海相・オオ佳人の出し物
であり、そこには社会主義的要素
のひとかけらも存在しない。
こうした遊戯状況のなかで、
民衆のあいだには一部に「西洋
がぶれ」「日本へのがぶれ」
そして「旧中国の顔」さえぞ
いっているような状況もあり、一
方、下放知識青年の非行化問題
や中堅幹部の意気沮喪(そそ
ろ)と、日和見主義的な文革の後
遺症もまた大きい。

風化する『毛沢東思想』

中国の転換とその矛盾

中島 嶺雄



7.10 A

風化する『毛沢東思想』
のなかには、一九六六年秋
の文化大革命の高潮期、七五年
一月の「四人組」による「批林
批孔」運動の時期に次いで、今

つがびい知(ち)をとりてきたた
けではない。最近の中国の論議
や指導者の発言に見られるよう
に、いわば一九五五年後半の急
激な農業集団化以降のプロセ
ス、すなわち毛沢東路線による
社会主義建設そのものが問われ
つつあることによつても明らか
である。

や五七年の反右派闘争で「反党
作家」として失脚していった著
名な女流作家、丁玲(ていれい)の
な姿が「人民日報」の紙面に写
真入りで出ていた(二月五)
も知る事ができる。これらより
幹部はけつして文革の犠牲者で
はなく、まさに毛沢東路線によ
る受難者であったといわねばな
らない。

つているが、そこには一時抑圧
されたと報じられた反体制雑誌
『北京春』の第五号、第六号
がガリ版刷りして出ていたばかり
か「劉少奇同志に思いを寄せ
る」として文革後新聞が新た
に誌(し)り出されていた。

人民公社を助けるも、文革期
の名残としての「農業は大衆
の答えか返ってきたが、北京

ではある幹部が「二百一包」政
策案のものを高きする(む)り
であつた。
演劇や文壇も百花のものか
の五月から復活した。西安は
四川省の古興劇(高老登奇遇)
を演じたが、これにはほま
に空海相・オオ佳人の出し物
であり、そこには社会主義的要素
のひとかけらも存在しない。
こうした遊戯状況のなかで、
民衆のあいだには一部に「西洋
がぶれ」「日本へのがぶれ」
そして「旧中国の顔」さえぞ
いっているような状況もあり、一
方、下放知識青年の非行化問題
や中堅幹部の意気沮喪(そそ
ろ)と、日和見主義的な文革の後
遺症もまた大きい。

海外特派大教授